

2019年 和鉄の道を振り返って

2019年 和鉄の道・Iron Road トピックス

2019.12.31. Mutsu Nakanishi

和鉄の道・Iron Road 8件 風来坊・Country Walk 11件 四季折々・from Kobe 9件

平成から令和に変わり、激動の時代に。炭酸ガス増加による地球温暖化がもたらす自然災害の脅威が我が身にも迫る。地球はどうなってゆくのか・・・

約40億年前 鉄の惑星地球で シアノバクテリアが鉄の助けも借りて、大量の炭酸ガスを原料に光合成を行って酸素を作り、人を含む現生物の時代を作り上げた。

今 また鉄が新しい道を切り開いてくれないものか・・・

そんなことを頭に浮かべつつ、新しい鉄の時代の夢を膨らませています。

本年は製鉄関連遺跡を訪ねたり、新しい鉄の姿もご紹介できませんでしたが、謎に包まれていた製鉄の歴史・たたら製鉄の謎がベールをぬぎはじめた新しい年になりました。

1. 鉄の起源・鉄の伝播探求<< ユーラシア大陸を東西に結ぶ鉄の道Metal Road >> 数々の成果を上げてきた愛媛大東アジア古代鉄文化研究センターが本年4月にさらなる発展を目指して「アジア古代産業考古学研究中心」へと継承改組。



村上恭通教授が率いる愛媛大 東アジア古代鉄研究センターが10数年に渡り、関係諸国との共同調査研究により取り組んできた鉄の起源・鉄の伝播探求<< ユーラシア大陸を東西に結ぶ鉄の道Metal Road >>の共同研究プロジェクト・「たたら製鉄の源流 鉄の起源 & 西アジアで生まれた製鉄技術のユーラシア大陸東遷の道」をまざまらかにするなど数々の輝かしい成果をあげて、一旦終わる。

今まで定説だったヒッタイト人工鉄起源説を覆すヒッタイト以前の人工鉄の発見や数々の遺跡発掘などユーラシア大陸の関係各国との連携共同調査を通じて、西アジアで生まれた製鉄技術のアジア大陸東遷の道筋を解明した。(鉄が東遷した砂漠地帯の北側 草原の道)

その輝かしい成果は毎年国際シンポジウム開催を通じて広く公開され、研究者ばかりでなく、一般人にも広く最新成果を公開提供してきた。私にとっては毎回聴講させていただき、たたら製鉄の源流を極める最新の研究成果を教えてもらえる楽しいシンポジウム。その都度聴講メモをホームページで記録紹介させてもらってきた。

その愛媛大 東アジア古代鉄文化研究センターが、さらなる発展を目指して「アジア古代産業考古学研究センター」へと継承改組。一つの区切りを迎えた。

今までその都度私の聴講メモとして紹介してきた関係記事を一覧リストにして、全体を眺める資料に。

まさに たたら製鉄の源流を解き明かす嬉しい整理資料 私の財産にもなりました。

Iron Road ・和鉄の道記事掲載by Mutsu NMakanishi2019.3.25.

《聴講を中心とした愛媛大学東アジア古代鉄文化センター国際シンポジウム関連掲載記事リスト》

<https://www.infokkna.com/ironroad/2019htm/iron15/1904tetsunokigenehime.pdf>

「愛媛大学 東アジア古代鉄文化センターのシンポジウム聴講を中心に人工鉄・製鉄技術の起源を探る関連掲載記事リスト」に収録させていただいた記事の中味は愛媛大学東アジア古代鉄研究センターの研究成果そのものの記録。

その成果を聴講メモとして 和鉄の道・Iron Road に掲載をさせていただいたことに深く感謝。

動画スライドにもさせていただきましたので、私の頭の整理の資料集としていつも活用しています。

「鉄」の名前が消えたのは残念ですが、開設以来 培ってこられたユーラシア大陸諸国との連携・交流を一層深め、産業考古学・古代鉄の分野にこだわらず、さらに活躍していただけるよう期待しています。

2. 徳島の山間に出土した弥生後期の生産工房遺跡 加茂宮の前遺跡

淡路島の舟木遺跡などと同じく 鍛冶工房を有する交易を意図した大生産工房集落

弥生後期から末期にかけて淡路島津名丘陵に出土した林間生産工房群とその中心舟木遺跡の登場に日本の国造り・大和との関係 並びに朝鮮半島交易をイメージして、その展開を期待していましたが、本年は特に大きな展開なし。

一方 淡路以外の徳島で、同じような鍛冶工房を持つ交易を担う弥生の集落 加茂宮の前遺跡が徳島から出土した。辰砂・朱の主産地の若杉山からのすぐ近く。やっぱり淡路島だけではなく畿内・瀬戸内周辺には淡路島の舟木遺跡や五斗長垣内遺跡と同じような半島交易を意識した鍛冶工房などの生産工房を有する交易集落がいくつもあったのだと。

今後の展開に期待が高まりました。

ちょうどそんな折 愛媛大学村上恭通教授が徳島で

「弥生時代の鍛冶工房に関する基礎論 -加茂宮ノ前遺跡の鍛冶工房を理解するために-」と題して講演。

弥生の後期・末期 日本各地 とりわけ 大和と繋がる瀬戸内東岸周辺に出現した半島交易を意識した鍛冶工房を有する生産工房集落をどうみておられるのか 興味津々。

町興しとしては大和・半島交易を意識して・・・となるのですが、考古学の立場からはむしろ否定的。

むしろ特産品を有する在지가 半島交易を行っている北部九州との交易で得た見聞をもとに

在地に必要なかんたんな鍛冶工具類等を作る鍛冶工房に見えると説かれた。

これらの鍛冶工房では 高度な高温鍛冶が行われていた証拠はないと至極明快。極めて冷静な分析に頭をガツン。

日本各地で出土する鍛冶工房を日本の国造りと絡めて、浮かれて過大評価してはならぬと。

でも 弥生後期・末期には日本各地で活発に鍛冶工房が動き出したことは

いよいよ日本の国造りが各地で動き出した感が強いと感じます。



また、12月 角田徳幸氏著「たたら製鉄の歴史」に出会えたことも収穫。
 一番知りたかったたたら製鉄の原料 砂鉄について 色々知見を得て、頭もスッキリしました。
 本年は具体的な製鉄関連遺蹟を訪ねることができませんでしたが、
 鉄の起源・たたら製鉄の源流と新しい考古学資料に基づくたたら製鉄の歴史レビューに出会えて嬉しい1年。
 歳とともに なかなか出かけることが難しくなってきましたが、まだまだ好奇心は旺盛 足も動くので気ままな風来坊
 ですが、鉄をキーワードに来年もと。 引き続きよろしくおねがいします。



◆「名刀匠三条宗近が信仰する稻荷明神の化身子狐(童子)を相槌にして、名刀「小狐丸」を鍛え上げた」という
 謡曲「小鍛冶」の舞台 旧東海道 京都三条通 栗田口に鍛冶伝承の痕跡を訪ねる 2019.10.9.



本年は製鉄関連遺蹟を訪ねたり、新しい鉄の姿もあまり紹介できませんでしたが、なんとといっても、西アジアで
 生まれた人工鉄がユーラシア大陸を東遷してゆく道筋が明らかになってきたこと。
 謎に包まれていた製鉄の歴史・たたら製鉄の謎がバールをぬぎはじめた新しい年になりました。
 また、日本の国造りが始まる黎明の時代 畿内周辺や日本各地で鍛冶工房が北九州の先進鍛冶と呼应しながら
 鉄鍛冶技術が育まれてゆく姿も見えてきた。
 これらの技術が日本の製鉄技術誕生へと繋がっていくのもそう遠くない。
 新しい今後の知見に興味津々です。